

その日の夜。

ツバメの父から食事会に誘われ、部屋へ戻ってきたのが先ほどのこと。

食事会中、何度もお礼を言われた。

振る舞われた豪勢な食事の味は、緊張していてよく覚えていない。

それから数十分後のこと、この部屋をノックする音が聞こえた。

扉を開ければ、部屋着のツバメが立っている。

「ツバメ？　どうしたの？」

「よかったら、うちの薬草園を見ていかない？」

「いいの？」

「もちろん。あ、冬だから虫はそんなにいないと思うよ」

「……それは、ありがたいわね」

私は肩をすくめた。

そして、ふたりで薬草園へ向かう。

「ここだよ」

「本当に、大きいわね……」

ツバメに連れられてやってきた薬草園は、リーファとは比べようがないほどの大きさだった。

思わず、言葉を失ってしまう。

「好きに見て回っていいよ。許可はもらってるから」

「ありがとう。……ツバメはここで、育ったのね」

「そうだね。前任……今は前々任か。その庭師さんに色々教わったんだ」

懐かしむようにツバメは瞳を細める。

小さいときの彼を想像しながら、私も目を閉じた。

かすかに吹き込む風が植物たちを揺らす。
そのささやきのような音が、心地よかった。

「ルル。今日は本当に、ありがとう」
「食事のときに何度も聞いたわ」
「あはは……、そうだったね」
「あなたが全てを正直に話してくれたから、それに応えただけのことよ」
「それでも、さ。誰に使うかっていうのを決めるのは、ルルだから」

いつ、誰に使うのか……。
父の言葉が脳裏をよぎる。

「誰かを救うために、あの薬は存在しているの。私は薬師^{くすり}として選んだだけ」
「薬師として、か……。うん、ルルらしいね」
「そうかしら」
「とっても。いつも患者さんのことを考えていて、向き合って。そんなルルの^{そば}で働けることが、うれしいよ」

彼の真剣な声が、広い薬草園に消えていく。

「大げさよ」
「本当のことだよ」
「本当……」

ツバメの本心。
偽らない彼の心、言葉に、少しでもくすぐったくなった。

「クレールに戻ったら、また、よろしくね」

「ええ。こちらこそ」

きっと、またふたりでやっていける。

もう隠しごとのない私たちは、新しい季節に足を踏み入れようとしていた。



うららかな春の陽気が、クレールの町に降り注ぐ。

もうすっかり見慣れてしまった町並みを歩けば、時折名前を呼ばれた。

野菜や果物、お菓子なんかももらって、俺はいっぱいになった^{くすりかご}薬籠をさげ、リーファへ帰る。

「あら、またいっぱいね」

待合室にいたルルは俺の手元を見て笑った。

「なにが入っているの？」

「イチゴと菜の花と……ジャガイモかな」

「またたくさんもらってきたのね。イチゴはさっそくお菓子にしようかしら」

「本当？ なにを作ってくれるの？」

「ケーキにクッキー、タルト……ツバメはどれが食べたい？」

「うーん。どれもおいしそうだから迷うな」

「じゃあ悩んでおいて。今日はあとひとり、診察が残っているから」

ルルはそのまま診察室へ入っていく。

俺も居室へ^{きょしつ}続く扉を開き、廊下を進んだ。



廊下の木がきしむ音。

薬草園が見える窓は青く輝いて、春風に揺れる。

鍵のかかった調薬室を過ぎてキッチンに籠を置くと、その足で薬草園へ向かった。

春になって、次々と花が咲いていく。

冬よりもにぎやかになった庭を見て、うんと背伸びをした。

「ああ、あったかいな」

俺のつぶやきは、植物たちのささやきの中に、溶けていった。

エンディング E 【柔らかな陽気に包まれて】